お城だより

2007年1月
No.12

福岡城跡の四季

新春を賀し、名月に平和を願う

鴻臚館・福岡城跡
歴史・観光・市民の会　理事
（財）黒田奨学会　理事長
各務　章

皆様、明けましておめでとうございます。

私達市民の会も、更に活動を充実し、その輪を市民に広げたいと願っております。

会の一年は、「春の桜祭り」、「秋の観月の宴」、更に「歴史探訪研修会」の三大行事の開催が基本です。

昨年の「観月の宴」は十月六日、舞鶴公園西側広場で、約千五百名の賑やかな参加の中で開催されました。（十一号に写真掲載）

古式に習っての「五供の儀」等子ども達の教育にもなりましたが、特筆すべきは、満月への感謝の拝礼を、参加者全員起立で行なった事です。昨年もそうでしたが、これは他に例を見ない市民の誇りでもあります。太陽・月・星の大自然の運行の中の私達の生命です。四季の移り変り、動植物との共生。これに感謝の礼をする事の大切さを実践しているのです。教育基本法の改革の先例でもありましょう。生命への感謝こそ、平和への道筋です。

市民の会（略称）は今後ともその原点を忘れず努力を重ねる所存です。皆様の暖かいご協力、ご支援を、心よりお願い申しあげます。

韓のくに紀行と朝鮮王朝の文化に触れる旅

韓国観光公社慶南協力団主催　夕食歓迎晩餐会　平成十八年十月二十三日大邱プリンスホテル

ごあいさつ

福岡城市民の会　**野田　弘信**

韓国観光公社福岡支社設立三十周年、誠におめでとうございます。

この度は、韓日両国に共通する「歴史の旅」を企画いただきありがとうございました。

私共の国、日本とりわけ九州にとっては

○筑紫・太宰府と鴻臚館の設置

○福岡城や熊本城の築城

○李朝・通信使のはじまり

等々の「歴史的故知」をめぐる事が出来ると大変喜んでおります。

昨日・今日と現地を訪れ、期待通りであったと改めて、韓国とわが国の関係の深さに感激を致しているところであります。

私は常々韓国とわが国は、太古の昔より先祖を同じにする民族であると思っております。今後、このような市民ベース・民間ベースによる交流を通じて「近くて近い」国同士になりますよう、念願するものであります。

この観点から、鴻臚館・福岡城跡歴史観光市民の会といたしましては、毎年この様な歴史観光ツアーを実施したいと思っています。

最後になりましたが、この様な夕食歓迎晩餐会を催していただき誠にありがとうございました。

竹城里倭城跡

韓のくに紀行　竹城里倭城跡を訪ねて

井上　淳一

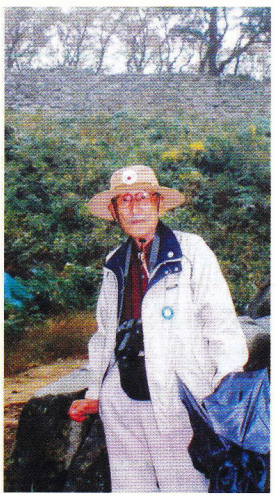
史実によれば全国統一を成し遂げた豊臣秀吉は次の目標を大陸征服に置き、一五九二年（文禄元年）朝鮮国および明国に出兵しました。黒田長政は先発三番隊として一万二千の兵を従えて出陣渡海し、また一五九七年（慶長二年）には再び先発三番隊として一万の兵とともに朝鮮国に出陣しました。しかし、慶長三年八月秀吉の死により七年にわたる朝鮮の戦役は終わりを告げたのです。黒田長政は朝鮮入国後釜山の東北二十五kmに位置する機張に拠点となる竹城里城を築きました。この城址は現在も竹城里倭城跡として韓国によって保存管理されており、また、同時期、加藤清正が機張の北に位置する西生浦に築城した西生浦倭城とともに典型的な日本式城塞の遺跡として評価されています。

今回の「韓のくに紀行と朝鮮王朝の文化に触れる旅」で最も期待した所がこの黒田長政築城の竹城里倭城遺跡で、生憎の小雨のなか海抜六十四mの本丸跡に登りました。高台から望む日本海に面した豆毛浦の入江は穏やかに美しく、ここがかつての兵站基地、軍事基地だったとは思えない平和な眺めでした。ここでは、福岡から携えてきた井上周防之房の遺影に『ここが貴方が戦っていた古戦場ですよ、四百年余の時が私たちを隔てているのですね』と語りかける感無量の時間が過ぎてゆきました。本丸跡では、所々に紅葉した蔦の絡んだ石垣が聳え、松風がそよいでいました。

このほか、朝鮮王朝の文化に触れる旅として慶州、安東、大邱、扶余を巡りましたが、この中では、安東・河回村の両班文化に強く心を引かれました。石を埋め込んだ瓦葺きの土塀に囲まれた路地、掃き清められ塵一つない道路、整然とした両班住宅、築四百五十年を経た民家、草葺きの丸い屋根、所々に柿が実る風情は、今は忘れられたかつての日本の田舎を思わせるものでした。河回村では、八百余年に渉って伝承されてきた重要無形文化財の仮面劇を見ることができました。国宝として保存管理されている仮面のレプリカを着けて、優しい身振りで舞う仮面劇の演技は、能登の鬼太鼓、能狂言などを思い起こさせる素晴らしいもので、うっとりとカメラのシャッターを切るのを忘れるほどのものでした。

今回の旅で特に感じたことは、実りの秋を迎えた韓国の農村風景は建物を除いて日本の風景そのものであること、また、優れた道路行政により整備された道路、街にキリスト教の教会の多いことやハングル文字を除けば我が国に大変近い国ということでした。

最後に今回の旅にあたって大変お世話になった韓国のみなさん、日本の皆さんに心から感謝申し上げてこの稿を終わりたいと思います。



井上　淳一氏

福岡城こぼれ話

新春早々ではありますが ―お綱門（2）―

大隈　和子

前回、お綱さんが息絶えた門―後にお綱門と言われた門はどこだろうという宿題を残しておりました。もともとお綱さんのお話は、げなげな話、史実ではないのですが、いつの頃か、あの門にさわると祟りがあるぞと、人々に言われるようになった門―通称お綱門が存在するようになったのは事実ですから、それはお城のどの門にあたるのかを調べてみました。

が、結論を先に言いますと、現在までのところ、はっきりしたことはわかりませんでした。先人の説もいろいろですし、また福岡城のどこにどんな門があったか、それらの門の内、明治以後、福岡第二四連隊が駐屯した時にも残っていたのはどの門か―大正四年の新聞記事の中に「お綱門」という言葉あり、また、お綱門で立番する兵隊は異常を訴えたと伝えられているとのことなどから、明治以後も建っていた門の一つということになるが―など、調べがつきませんでした。近年、福岡市史の編纂が始まり、そこで福岡城に関する絵図や史料を集めるよう努力しているということですので、それらが集まった段階で、改めてお綱門の場所を考えてみることにして、今回は、先人の諸説をまとめて掲載することで、お綱門探しの一件はお許し願えればと存じます。

出版の古い順から書いていきます。

①昭和四八年八月十三日西日本新聞朝刊「怪談福博の夜ばなし①お綱さんばなし」には「父が馬回役だったという古老（八一）は『お綱さんは、浅野邸によらず、まっすぐに四郎左衛門の詰め所まで走った。護国神社側の追廻門（おいまわし）から入って、いまのラグビー場側を通って平和台球場裏にあたる詰め所にきた。ところが詰め所の門がしまっていたので、土塀に飛びついた。いくら飛びついても土塀ガワラがずり落ち、果たせないところを城の武士に切り伏せられた』と言う。」（―は筆者）

②昭和五四年四月発行。『日本の伝説33 福岡の伝説』劉　寒吉他では「福岡城の本丸から扇坂へ下るところにあったその門は…」とある。

③昭和五七年七月対談「博多の幽霊ばなし」（『博多に強くなろう』福岡シティ銀行編）で波多江五兵衛氏は「本丸から扇坂にくだってくるところ、今でいう東門の奥のあたりに、誰言うとなく呼ばれたお綱門がありました。」と言い、聞き手の帯谷瑛之介氏は「扇坂まで行って門に手をかけたところで息絶えた…」

④平成十二年六月発行『福岡県の昔ばなし―お話の舞台を訪ねて―』高良竹美には「扇坂下の門までたどり着いたところで力尽き、扉に手をあてたまま、息絶えたのでした」

最後に直接お綱門についてではないのですが、場所のヒントになるような新聞の記事を。

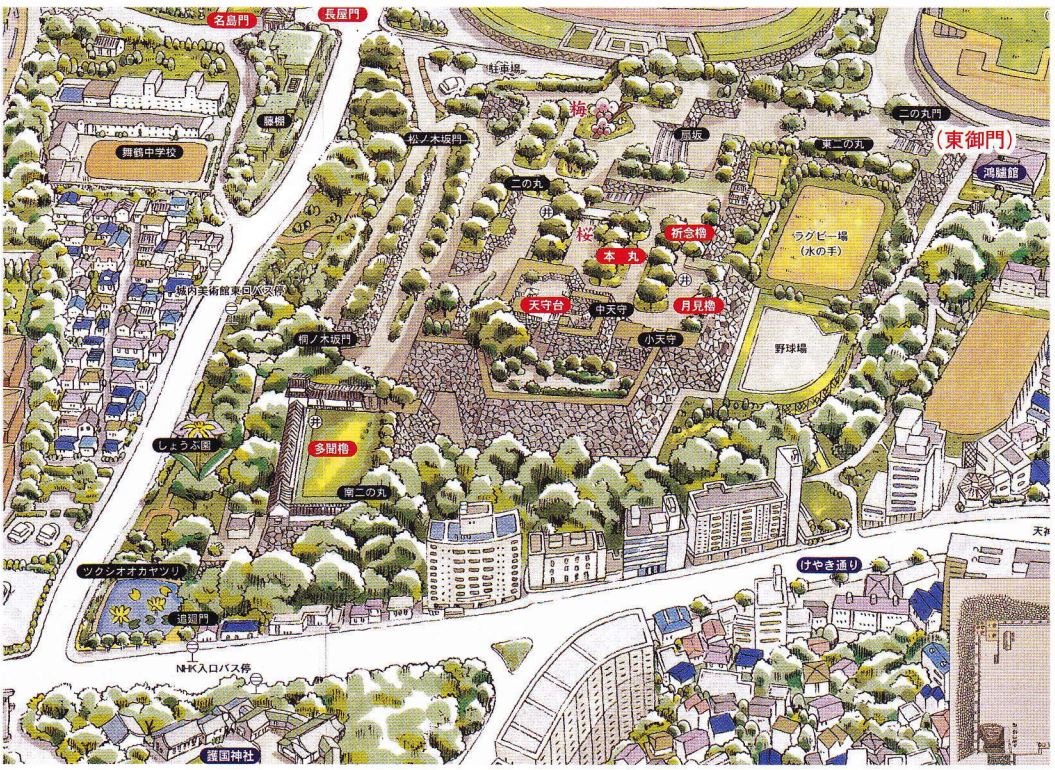
⑤大正四年八月九日福岡日日新聞より「福岡城址より珍人形近頃續々掘出さる　福岡衛戍内櫓（えいじゅやぐら）門の左方扇坂とお綱門との中間なる廣さ一畝歩許りの開墾地より此程不圖（ふと）素焼の人形を発掘せるが…」とあり、一畝歩の開墾地が城内のどの辺りだったかがわかれば、お綱門の場所ももう少し具体的になると思うのですが。これも今の所、手掛かりがありません。

どうも本丸から扇坂に下って来る所から東御門までの線上あたりにあったのではないかと考えることが出来るのではないでしょうか。

お綱門の行く末、お綱さんの墓については次回に、また。

（参考資料　石瀧豊美「お綱さんツアー」）

（歴史研究家）



福岡城跡周辺散策マップより

INFORMATION

新規会員名簿（10／20～12／4入会分）

正会員（個人） 1名

田中武博

一般会員（団体） 1団体

九州電力（株）総務部

一般会員（個人） 10名

大賀康子　徳久秀毅
桒原正富　西嶋良枝
高木喬蓮橋史代
棚町俊二山理子
山本道子

更新会員名簿（10／20～12／4入会分）

正会員更新会員（団体） 2団体

（株）アイ・ピー・エス　勝立寺

正会員更新会員（個人） 4名

上原晃　西高辻信良
中島敏行　宮川毅

一般会員更新会員（個人） 16名

青柳豊子　鶴一馬
市岡美代子　陶山秀昭
鹿毛博通　前田重光
勝瀬佐昭　松尾正宦
酒匂俊憲　水上千世子
新内善夫　三角幸子
鈴木襄二　山田裕嗣
高橋貞雄　渡辺由美子

（敬称略・順不同）

第11号の訂正
岩見和美→岩尾和美

母里太兵衛の読み方について　その奇しき縁（えにし）

稲田　淳

近頃の本で母里太兵衛と記した個所に態々「ボリ」と振仮名が附けられて居るのを散見する。私はそれが誤りと思うので、その理由を明かにし度いと思う。

抑母里太兵衛の先祖は播磨國が古郡母里村に住み、父は曽我大満と云い、母里氏となったのは太兵衛の時である。初代母里太兵衛は剛勇人に秀れ、正親町天皇より足利将軍、織田信長公、豊臣秀吉公、福島正則候と、次々に下賜された天下の名槍日本号を飲み取った事で、余りにも有名であるが、江戸時代初期の慶長十一年（一六〇六）江戸城天守閣の石垣修造を黒田長政候に将軍が命ぜられ、母里太兵衛が工事を担当し、竣工の暁将軍秀忠公が工事の司であった太兵衛に、褒美として御腰の物を拝領仰付けられ、その節の書出しに、毛利太兵衛と有ったので、太兵衛は之を主君長政公に報告した処、候は此の際母里を「毛利」に改めてはどうかと言われたので、以後母里を「毛利」に改め十代毛利太兵衛の代に明治維新を迎え、明治五年（一八七二）壬申戸籍作成に際して毛利姓を昔の「母里」に戻し、慶長の頃の様に読み間違えられるの防止する為、思い切って読みをモリから「ボリ」に変更したものであろう。

江戸時代に著わされた「近代正説砕玉記武将感状記」に母里と記す可き処を「森」と宛字で書いて有るのを見ても、江戸時代初期には母里太兵衛を「ボリタヘエ」ではなく「モリタヘエ」と読まれて居たのは確かである。

編集後記

新しい年を迎えました。

NPO法人として3年目、正念場の年でございます。

私たち皆の目標、福岡城の再現は少しずつ歩み始めました。

福岡市では、四十七の櫓の復元等、三十年の長期計画で実現されていくそうです。ハードルの大きい天守閣の再現は、市民サイドの夢として実現に向けて真剣に取り組んでいきたいと思っています。

今年を「福岡城復元元年」と位置づけ、数々の事業活動、さらに具体的な将来への施策等を構築していきたいと考えております。

会員はじめ関係各位の皆様方の多大なご理解とご支援を切にお願いいたします。

編集・発行／鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会
住所／〒810－0042 福岡市中央区赤坂1－12－15 読売福岡ビル7階
FAX 092－716－8254
TEL 092－716－8238
HPアドレス http://fukuokajokorokan.npgo.jp/
E-mail fukuokajo@tos.bbiq.jp
デザイン・印刷／(有)セブンプリンティング

財団法人　黒田奨学会

本会は黒田家より土地の寄贈を受け、1915年に財団法人黒田奨学会を設立。旧黒田藩の子弟育成の主旨を引き継ぎ、社会有為の人材育成を目的として大学生への奨学金給付制度を行っている。

本会の役員は、その殆どが、この奨学制度の恩恵を受けた人達で組織されている。

黒田奨学会役員

総裁　黒田長久（第15代当主）
理事長　各務章
理事長　徳重
理事　目加田さくを
理事　田中崇和
理事　馬頭徹夫
理事　東寺正和
理事　横山信彦
理事　久野修資
理事　新原潤一郎
理事　横大路俊一
理事　久保田康史
監事　伊達健太郎
監事　渡辺幸信
顧問　二田良之
事務職　大島汐子
事務職　栗山由利子
事務職　小林桂子